

雅楽公演「源氏物語の雅楽」解説

田中英機

第一部 源氏物語の女楽

▼田中 本日奏者としてお招きした芝祐靖氏は雅楽の世界の第一人者です。その芝さんと一緒に演奏していただくのが、伶楽舎（れいがくしゃ）という雅楽集団の方々です。コンサートはもとより、テレビ、CDその他で大活躍をしておられます。本日はオールメンバーというわけにはいきませんでした。ベストメンバーに集まっていたら、源氏物語の音色、響きを皆さまに楽しんでいただきたいと考えています。

その中で「我家（わいえ）」という宮中でも歌われた民謡、催馬楽の曲を皆さまと一緒に歌っていただくという趣向も考えております。

私は源氏物語のいい読者ではありません。最初の桐壺の巻だけは一生懸命読んだのですが、後は谷崎源氏でごまか

してしまいました。そういう者にとって、ばっさりと斬りつけてくる、また笑ってしまうような名句がありました。「古典とは、文学の基準的、永久的価値ありとみなされる作品で、大抵の人が読んだつもりになっているが、実は読んでいない本」

「源氏物語の不幸は一つ、長すぎることである」

前のは西洋のあるユーモア事典に載っていた一文で、後の折口信夫の弟子で慶応義塾大学の池田弥三郎さんが師のことはとしてエッセイで書いていた文章です。つくづく、「そうなんだ、そうなんだよナア」という気持ちで自分を納得させて、源氏物語とはついつい距離を置いてきました。

謡曲、能の世界では、現行曲のなかの源氏ものが、しょっちゅう奏演されています。源氏物語に関してはいい読者でない者が、芸能論からの切り口でいうと、能を拝見し、それを読み取っていくためには、どうしてもその原点を追っていかざるをえないのです。能の舞台を見ながら源氏物語のその部分だけをつまみ食いのように読ませていただく、そういう読み方をするうちに、能から源氏物語を読むと、源氏物語とは生霊、死霊、物の怪、こうしたものが次から次へと出てくる靈魂の物語だな、と感じます。

作者紫式部は、光源氏の生涯を描こうとしたんでしょうが、それは表向きのもので、実は怨霊たち、靈魂の世界を書きたかったのではないのでしょうか。例えば六条御息所は生霊、死霊、あるいは物の怪となり、さまざまな形で出てきます。全編を通して重要な場面に出てくるような気がします。作者紫式部は表向きは光源氏を描きながら、実は六条御息所の霊のことが書きたかったのではないか、能を見てるとそんな印象を受けます。

源氏物語には光源氏が、雅楽のなかの舞楽と呼ばれる舞を舞う場面がいくつもあります。とても印象的なのは、紅葉賀巻のなかで頭中将と「青海波（せいはいは）」という曲を舞うくだりです。現在の雅楽の中でもほんとうにいい

曲で、大変な人気曲です。宮内庁の楽部、その他の雅楽集団が折々、大事な曲として演奏し、私たちを楽しませられる美しい曲です。

光源氏がこの「青海波」を舞うときに、秘かに思っている藤壺は懐妊しています。光の子どもを宿しているわけです。彼女ははらはらしながら、自分の犯した過ちを思いながら、光の君の「青海波」をじっと見ているわけです。光は帝のことはさておいて、「俺の舞を今、藤壺が見ている」そんな気持ちで舞を舞っている。物語はそうですけど、舞われている曲はとても大らかな祝福の舞です。

もう一つ、光源氏が舞う曲に「春鶯囀（しゅんのうでん）」があります。これは花宴の巻ですが、藤壺とあの恐ろしい弘徽殿女御の二人が見ている前で、春になって鶯がさえずるという曲を舞うわけです。原作のその場面を読むと興味深いものがあります。

源氏物語には、他にもさまざまな曲が演奏され舞が舞われています。生霊、死霊、物の怪などが発動するとき、そこには音楽があります。おそらく神霊的なものが動くときには、どうしても音楽が必要だったのでしょう。

源氏物語はそういう意味では、全編、通奏低音として雅楽がずっと鳴り響いている、そういう物語、音楽物語だと捉えることができるかもしれません。

それでは、演奏に入りたいと思います。本日のプログラムの最初は、源氏物語の「女楽（おんながく）」です。「女楽」とは、源氏物語の若菜の巻で朱雀院（光源氏の異母兄）が五十の賀を迎える年の正月、光は六条院という自分の邸（やしき）で、これまで関わりがあった女性たちを集め、琴を合奏させますが、その時の女性たちの演奏をいいます。

女三の宮は琴（きん）の琴、紫上は和琴（わごん）、明石の君は琵琶、明石の女御は箏の琴です。源氏物語にそう

書いてありますが、一般に源氏物語に出てくる楽器群は、弾きもの、弾いて音を出すものはすべて琴（こと）と呼んでいました。

ですから、「琴の琴」というのは、普通は弦のところを柱（じ）という、音程を調節するものがあり、琴柱（ことじ）と呼びますが、これがなく、糸が張つてあるだけのものです。演奏しにくいですし、大きな音は出ません。「箏の琴」が、私たちがいま通常、琴と呼んでいるものです。

こういう楽器を女君たちに、それぞれパートを持たせて演奏させるわけです。光はそれを聴きながら、唱歌、つまり口ずさんだりして、一夜を琴の宴として過ごします。これは朱雀院のための試楽とされています。

そういう世界を芝祐靖さんと伶楽舎の皆さんに演奏していただきます。

芝祐靖さんは、昭和三十三年に宮内庁式部職楽部に入り、約三十年間を楽師として活躍されました。その後は作曲家、演奏家として活動されています。この間、作曲で芸術祭の優秀賞を受賞され、モービル音楽賞、中島健蔵賞など重要な賞も受けておられます。

最近では日本芸術院の院賞、天皇陛下からの恩賜賞も受けられ、平成十五年には雅楽の世界ではまれな芸術院会員にられました。雅楽界ではその最高峰をきわめた方といえます。

では芝さんにご登場いただきましょう。

▼芝　　こんにちは。芝です。実はこの女楽ですが、源氏物語には具体的にどの曲を演奏したかは書かれていません。何調かというのわかりません。また、弦だけで演奏するということは、メロディがないわけです。何を弾いているのかわからない、というのが雅楽の楽器です。笛や箏（ひちりき）があればメロディを奏で、弦楽器はそれに合わせて弾きます。源氏物語では、きれいな女性ばかりを集めて弦楽器を演奏させたわけですね。

本日ここでは三人で演奏しますが、現在の雅楽では弦楽器だけの演奏はありません。必ずメロディを奏でる楽器が加わります。ですから、本日演奏するのは「春遙歌」という短い曲と「胡飲酒」という非常に短い曲で、わりと軽快な感じの曲をお楽しみいただきたいと考え、曲目に入れました。

▼田中 最初に楽人の方々が入場してまいります。その際に「白薄様」という歌を歌いながらとなります。本日はこのような狭い場所ですが、本来は、道行きしながら。

▼芝 そうですね。普通は露台という天井のないところで演奏しますので、三々五々、歌いながら集まります。本日はその雰囲気を出してみたいと思っています。そして、この第一部が終わるときも、引きあげながら歌います。

▼田中 源氏物語の女楽の部分では、光源氏は特に紫の上に和琴という、中国・朝鮮半島から渡来したものではありません、元来日本にあった楽器を工夫したものを演奏させたときに、神々しい、修練された音色を豊かに聞かせてくれた、やはりこの人は違うな、と感じいったことが書かれています。そんなことも含めながら、お楽しみください。

【演奏終了後】

▼田中 これが、夜の更けるまでずっと続いていくわけです。ちょうど、光源氏の息子である夕霧の君もそこにはべっぴん、彼は目をつぶって、扇で拍子をとりながら、それをうっとり聞いているという描写も源氏物語にあります。

演奏の最後に「いざ立ちなむ」という歌が歌われました。「いざ立ちなむ をし（鴛鴦）のかもどり（鴨鳥）みずまさば（水が増えてくると）徳ぞまさらん（人の徳も増すだろう）」という祝福の気持ちを含めて、歌いながら楽人が退出していきます。この歌はフィナーレの祝歌として、折々に歌われます。

第二部 男踏歌

▼田中 第二部は男踏歌（おとこどうか）です。これは源氏物語の初音の巻にできてきます。光源氏の新築の邸・六条院ができて、初めて迎える正月、初春の行事として、舞人らが内裏・朱雀院を練り歩き、六条院にやってきました。夕霧ら若者たちが、華やかに着飾って、「竹河」を歌います。竹河は地方の民謡の一種である催馬楽の曲です。ただ、非常にノールに仕立て上げられて、もともとは庶民大衆が歌っていたものを、まるで貴族たちの独占物のように歌っていきます。そういう歌唱法の歌が催馬楽です。その歌を夕霧らが歌う姿の美しさは「絵にも描きとどめがたからん」と、源氏物語には書かれています。

この踏歌（どうか）というのは正月の行事です。奈良時代後期に中国から移入された風俗で、奈良及びその周辺の寺院で行われていました。本格的になるのは平安京が開かれてからです。その京のみやこの中心、御所、内裏に大勢の若い男女が、新しい年の満月の夜、つまり旧正月の一月十五日に集います。その前夜十四日の夜、身分の高い者も含めて、若い男たちが集まります。その時の様子は、まさに若い男たちが歌いながら乱舞するもので、「年中行事絵巻」に類型が描かれています。

十五日と十六日の夜には、今度は宮仕えの者も、庶民も含む女たちが、大挙して御所に練り込み、さらに町に出て練り歩きます。女踏歌です。

そして、この行事は宮中の行事から民間にも広がっていきます。満月の旧正月は小正月と呼ばれるようになり、現在も旧暦の一月十五日こそが本当の正月として、各種の行事を行う地方が多くあります。宮中で行われた踏歌が、民

間にも広がっていくわけです。「踏歌」というのは、大地を踏みしめて激しい乱舞をするからです。なぜ大地を踏みしめるかというと、人間に災いをなす悪霊を大地の中に斎（いわ）い込めてしまおう、鎮めていくという呪術的な意味があります。修験道では反閨（へんぱい）などと呼ばれるものです。

当時は、宮中と民間が今よりもっと身近で、宮中行事が民間・庶民にすぐ広がることもあったということを女踏歌、男踏歌という「踏歌」が示しています。

▼芝 出のところは「笛の道楽」です。軽いにぎやかな曲です。笛をならし鼓を打ちながら行列して出てきたのではないかと思われます。二曲目は「萬寿楽」というものです。歌詞は漢詩で今も残っていますが、メロディの方はまったくわかりません。これは萬寿楽だけでなく、その後の此殿者、葛城、竹河も同様です。

今、催馬楽で伝承されているのは六曲ですが、それはみな非常にゆつくりとした調子です。ですが男踏歌は旧暦一月十四日の夜から十五日にかけての猛烈に寒い時期です。ですから、御所を出て、六条院に着くころには、皆ごえりのような状態で、途中の貴族の家で酒をふるまわれて、勢いをつけた状態で歌ったものですから、そんなにスローモードだったとは思えません。それで、それなりの調子で、昨年は源氏物語千年紀でもありましたから、その折に作曲してみました。

最後に「我家」という曲を演奏しますが、軽いアップテンポな曲になっていますので、これは皆さんにも一緒に歌っていたださいたいと思います。

▼田中 この「我家」の中の「アビ榮螺か 石蔭よけむ」というところのメロディは現在でも東北や九州で歌われている民謡にそっくりなんです。宮中ですっかり雅楽化されていたものです。この面白さを芝先生に教わりなが

ら歌ってみましょう。

【演奏終了後】

▼田中 今お聴きいただいた男踏歌ですが、旧暦一月十五日というのは年が改まって、初めての満月の日です。元旦も大事な日ですが、人々にとって本当に大事な日は一月十五日だったという実感があります。その夜に、男たち、女たち、最初は男女別なく一緒だったようですが、時代が下るにつれ、男組と女組に分かれました。男踏歌は一月十四日の夜に群舞する芸能団が御所、内裏まで大地を踏みながら踊っていき、清涼殿という今上天皇がおいでのところまで行くと、天皇自らひさしまでお出ましになり、その祝福を受けられました。歌詞を見るとわかるとは思います、天皇をたたえ、この一年間の豊かな稔りを願う心が表されています。

つまり、新年にあたって皇室の前途を祝福したり、その年をお祝いする。そんな歌を歌い、踊り舞って、最後の催馬楽は、その直会（なおりい）のようなものです。

▼芝 なにぶんにも寒さに震えあがりながらですから、ゆったりとしては凍えてしまいます。エネルギーで、お酒も入った状態ですから。昔は「酒祝ぎ歌」というものがありました、この曲ではそのような雰囲気を出してみたいと思いました。

▼田中 芝さん、伶楽舎のみなさん、本日はどうもありがとうございました。